

平成 25 年 7 月 13 日

部員各位

明治大学雄弁部

経営学部 3 年 高岡 瞭

「読書について」

～読書は他人にものを考えてもらうことである～

目次

- 1、はじめに
- 2、思索
- 3、読書について
- 4、終わりに

1、はじめに

本を読んだだけで満足げに且つ偉そうに知識をひけらかす輩がいる。笑止千万の一言に尽きる。本を読んだことで得た知識を実際に使いこなせなければ何の意味もない。自分で考えることができなければ著者のテープレコーダーに成り下がるだけである。それに対して、見事に言い述べているのがショウペンハウエルの『読書について』である。このような考えを持っている人は少なからずいると思う。本レジュメではそのような考えに最良の策を提示すると思われるものを抜粋した。是非参考にしたい。

2、思索

【4】(p9～p11)

誰でも次のような悔いに悩まされたことがあるかも知れない。それはすなわちせっかく自ら思索を続け、その結果を次第にまとめてようやく探り出した1つの真理、1つの洞察も他人の著わした本のぞきさえすれば、みごとに完成した形でその中におさめられていたかもしれないという悔いである。けれども自分の思索で獲得した真理であればその価値は書中の真理に百倍もまさる。その理由は次の通りである。第1に、その場合にのみ真理は我々の思想の全体系に繰り入れられて不可欠な有機的一部となり、この体系と完全に固く結合し、整然と論理的に理解される。第2に、その真理はそのそなえる色彩、色調、特徴からして、いずれも我々自身の考え方から生まれたことを示している。第3に、その真理はちょうどそれを強く要求している時に現れたので、精神の中に確乎たる位置を占め、さらに消滅することはない。

そこで真理獲得のこのような事情は、ゲーテの次の一句の正しさを完全に保証する一例であるばかりか、その意味を余すところなく解説することになる。

『汝の父祖の遺せしものを、おのれのものとするべく、自ら獲得せよ。』

つまり自ら思索する者は自説をまず立て、後に初めてそれを保証する他人の権威ある説を学び、自説の強化に役立つに過ぎない。ところが書籍哲学者は他人の権威ある説から出発し、他人の諸説を本の中から読み拾って1つの体系をつくる。

他人から学んだだけに過ぎない真理は、我々に付着しているだけで——**自分で考えた結果獲得した真理は生きた手足のようなもので、それだけが真に我々のものなのである。**思想家と単なる学者との相違もこのような事情に由来する。

【14】(p22)

真に価値があるのは、**1人の思想家が第1に自分自身のために思索した思想だけである。**つまり一般に思想家を、第1に自分のために思索する者と、いきなり他人のために思索する者との2つに分類することができるが、第1のタイプに入る人々が真の思想家であり、二重の意味で自ら思索する者である。それは彼らが真の哲学者、知恵を愛する者だからである。すなわち第1に彼らのみが**真剣に自分を打ち込んで事柄を知ろうと努めており、第2にまたこの知る努力、言い換えれば思索にこそ彼らの存在の楽しみも幸福もある**のである。

第2のタイプの思想家はソフィストである。彼らは世間から思想家で思われることを念願し、かくして世人から得ようと望むもの、つまり名声の中に幸福を求める。その真剣な努力はこのように他人本意である。さて1人の思想家がこの2つのタイプのいずれに属するかは、その挙措動作をくまなく

見れば明らかである。

3、読書について

【2】(p127～p129)

読書は他人にももの考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。習字の練習をする生徒が、先生の鉛筆書きの線をペンでたどるようなものである。だから読書の際には、もの考える苦勞はほとんどない。——そのため、時にはぼんやりと時間をつぶすことがあっても、ほとんどまる一日多読に費やす勤勉な人間は、しだいに自分でもの考える力を失って行く。つねに乗り物を使えば、ついには歩くことを忘れる。しかしこれこそ大多数の学者の実状である。彼らは多読の結果、愚者となった人間である。なぜなら、暇さえあれば、いつでもただちに本に向かうという生活を続けて行けば、精神は不具廢疾となるからである。——多読すればするほど、読まれたものは精神の中に、真の跡をとどめないのである。つまり精神は、たくさんのごとを次々と重ねて書いた黒板のようになるのである。したがって読まれたものは反芻され熟慮されるまでに至らない。だが熟慮を重ねることによってのみ読まれたものは、真に読者のものとなる。——絶えず読むだけで、読んだことを後でさらに考えてみなければ、精神の中に根をおろすこともなく、多くは失われてしまう。

さらに読書にはもう1つ難しい条件が加わる。すなわち、紙に書かれた思想は一般に、砂に残った歩行者の足跡以上のものではないのである。歩行者のたどった道は見える。だが歩行者がその途上で何を見たかを知るには、自分の目を用いなければならない。

【6】(p133～p134)

読書に際しての心がけとしては、読まずにすまず技術が非常に重要である。その技術とは、多数の読者がそのつどむさぼり読むものに、我遅れじとばかり、手を出さないことである。たとえば、読書界に大騒動を起こし、出版された途端に増版に増版を重ねるような政治的パンフレット、宗教宣伝用のパンフレット、小説、詩などに手を出さないことである。このような出版物の寿命は一年である

むしろ我々は、愚者のために書く執筆者が、つねに多数の読者に迎えられるという事実を思い、つねに読書のために一定の短い時間をとって、その間は、比類なく卓越した精神の持ち主、すなわちあらゆる時代、あらゆる民族の生んだ天才の作品だけを熟読すべきである。彼らの作品の特徴を、とやかく論ずる必要はない。良書とだけ言えばだれにでも通ずる作品である。このような作品だけが、真に我々を育て、我々を啓発する。

悪書を読まなすぎるということもなく、良書を読みすぎるということもない。悪書は、精神の毒薬であり、精神に破滅をもたらす。

良書を読むための条件は、悪書を読まぬことである。人生は短く、時間と力には限りがあるからである。

【7】(p135)

幸い私は早く青年時代に、A・W・シュレーゲルの美しい警句に行きあたり、以来それを導きの星としている。「努めて古人を読むべし。真に古人の名に値する古人を読むべし。今人の古人を語る言葉意味なし。」

【8b】(p137～p139)

書物を買ってもめるのは結構なことであろう。ただしついでにそれを読む時間も、買ってもめることができらばである。しかし多くのばあい、我々は書物の購入と、その内容の獲得とを混同している。

「反復は研究の母なり」。重要な書物はいかなるものでも、続けて二度読むべきである。それというのも、二度目になると、その事柄の繋がりがよりよく理解されるし、すでに結論を知っているので、重要な発端の部分も正しく理解されるからである。さらにまた、二度目には当然最初とは違った気分で見、違った印象を受けるからである。つまり一つの対象を違った照明の中で見るような体験をするからである。

精神のための清涼剤としては、ギリシア、ローマの古典の読書にまさるものはない。たとえわずか半時間でも、古典の大作家のものであればだれのものでもよい。わずか半時間でもそれを手にすれば、ただちに精神はさわやかになり、気分も軽やかになる。心は洗い清められて、高揚する。旅人が冷たい石清水で元気を回復するようなものである。これはいったい古典語という完全無欠な言語のせいであろうか。それともいく千年の年月にも傷つけられぬ作品を生み出した精神の偉大さのためであろうか。おそらくこの2つが相伴って、我々の精神に不思議な作用を及ぼすのだろう。

4、終わりに

今回は補足資料という形ではあるが、読書会ということで、改めて読書についてさらに、雄弁部において欠かせない研究についても述べた。その中で改めて思索すること、己の思想を再帰的に問い続けることの必要性を改めて感じたのではないかと思う。故に大学生はそのような志を一つにする者同士が集まり、互いに高め合う必要がある。

参考文献

ショウペンハウエル (1983) 『読書について 他二篇』 岩波文庫